

# 男子高校生の喫煙に対する意識調査

高山 昌子\* 荒井 綾子\* 辻岡三南子\* 齊藤 郁夫\*

たばこに含まれる有害物質は、喫煙者本人の健康を害するだけでなく、受動喫煙により周りの人の健康にも悪影響を及ぼす。また、ニコチンによる依存性のために、喫煙が習慣化することも周知の事実である。日本人男性の喫煙率は55.2%と先進諸国の中では高く、そのうち半数近くが20歳未満に喫煙を開始しているという調査結果もある<sup>1)</sup>。したがって、喫煙防止には早い時期からの健康教育が必要で、特に高校生が喫煙についてどのような意識を持っているかを知ることは、今後の健康教育のあり方を考えるうえで重要である。そこで今回、健康診断で高脂血症を指摘され、健康教育の対象者であった男子高校生と、一般の男子高校生に対してたばこへの意識調査を行ったので報告する。

## 対象と方法

### 1. 対象

2000年度および2001年度の健康診断時、血液検査において総コレステロールまたは中性脂肪高値の生徒96名(2年生80名,3年生16名)と、1,2,3年生の各1クラスずつ、合計114名(1年生37名,2年生41名,3年生36名)である。総コレステロール高値(220mg/dl以上)または中性脂肪高値(150mg/dl以上)の生徒を高脂血症群とし、その他を一般群とした。

### 2. 調査票の記入

高脂血症群は、健康診断後の食事・生活指導のセミナー中に実施し、一般群は各クラスで随時実施した。

調査票は記名式で、質問に対して3~5の選択肢の中から回答を選ぶ方式をとり、複数回答を可とした。

## 成績

表1に、今回の調査結果の主なものを示した。

### 1. たばこの影響について

「がんになる」は高脂血症群90.6%、一般群86.8%と両群ともにほとんどのものが認識していたが、「心臓病をおこす」について認識しているものは、それぞれ12.5%、20.2%と少数であった。しかし、一般群を学年別でみると、1年生では29.7%と高率であった。また、「止めたくても止められない」についても、高脂血症群で35.4%、一般群で43.0%と一般群で認識しているものが多い傾向がみられたが、いずれも半数に満たなかった。

### 2. たばこへのイメージについて

最も多い回答は「おじさん」であり、高脂血症群で37.5%、一般群で31.6%であった。「その他」と回答したものも多く、それぞれ49.0%、57.0%であったが、そのうち具体的な記述をしたものは高脂血症群、一般群合わせ

\* 慶應義塾大学保健管理センター

表1 喫煙に対する意識調査結果

設 問	回 答	高脂血症群 (n = 96)		一 般 群 (n = 114)	
		回答数 (名)	%	回答数 (名)	%
たばこの影響について	心臓病をおこす	12	12.5	23	20.2
	がんになる	87	90.6	99	86.8
	止めたくても止められなくなる	34	35.4	49	43.0
	害はわかっていない	0	0.0	1	0.9
たばこへのイメージについて	大人っぽい	10	10.4	10	8.8
	男らしい	8	8.3	7	6.1
	おじさん	36	37.5	36	31.6
	美女	3	3.1	7	6.1
	その他	47	49.0	65	57.0
将来の喫煙について	大学生になったら吸う	2	2.1	9	7.9
	吸う気はない	79	82.3	90	78.9
	わからない	16	16.7	18	15.8
側でたばこを吸われることについて	なんとも感じない	10	10.4	15	13.2
	目やのどが痛い	10	10.4	25	21.9
	においが気になる	59	61.5	58	50.9
	病気になることが心配	36	37.5	52	45.6

て24名であった。内容については、死をイメージするものや健康に有害であることを書いたものが8名、喫煙行動を批判するものが8名、グサイ・汚いなどの印象を書いたものが5名、息苦しいなどの症状を書いたものが2名、精神安定のために仕方がないと書いたものが1名であった。

### 3. 将来の喫煙について

喫煙に対する将来予測では、両群ともに「吸う気はない」と回答したものが最も多く、高脂血症群で82.3%、一般群で78.9%であった。一方、「大学生になったら吸う」と回答したものは高脂血症群で2.1%、一般群で7.9%と一般群でやや多い傾向がみられた。

### 4. 側でたばこを吸われることについて

「何とも感じない」ものは高脂血症群で10.4%、一般群で13.2%と少数であり、大多数の

ものは何らかの迷惑感を有しており、複数回答するものも多かった。

## 考 察

たばこの影響については、その有害性に関して多くの調査結果が報告されており、判例でも認められるところであるが<sup>2)</sup>、生徒の認識は充分でないことが示された。即ち、発がん性については大多数のものが認識していたが、それ以外の影響についての認識は低かった。喫煙が健康に及ぼす影響については、1年生の前期に保健の授業で講義を受けているためか、「心臓病をおこす」という項目では一般群の1年生が29.7%と最も高い割合で認識していた。高脂血症群は、セミナーで高脂血症の合併症や虚血性心疾患と喫煙との関連についても講義を受けていたが、調査票を記入したのはセミナー前で、

今回の結果には反映されていなかった。しかし、授業でたばこの影響について講義を受けていることなどが、喫煙の将来予測において低い喫煙割合を示す一因になっていることも考えられた。また、以前の報告<sup>1)</sup>で、たばこを止めたいと思っている人の 81.8% は健康に悪いと思っていること、また止められない理由として「癖になっている」と答えたものが 37.7%、「やめるとイライラする・落ち着かない」と答えたものが 24.9% と依存性を示唆する回答が多かったことから、たばこの依存性について繰り返し教育を行っていくことが重要であると考えられる。

たばこのイメージについては、「大人っぽい」、「男らしい」、「美女」などの肯定的なものより、「おじさん」というどちらかといえば否定的なイメージを持つものが多かった。「その他」に記載されたものも全て否定的なイメージのものであったが、具体的に記載したものは 112 名中 24 名と少数であり、選択肢の後に括弧をつけて記載を促すようにすれば、より多くの回答が得られたのではないかと考えられる。小・中・高校生に行われたたばこのイメージについての調査でも、連想された 58 項目のうち 70% は否定的な項目であった<sup>3)</sup>。その中でも、「身体に悪い」というものが 49% と最多であった。今回の調査では、たばこの影響については別に設問を設けていたため、健康に関する項目は選択肢に入っていなかったが、「その他」としてイメージされるものの半数は健康に関するものであった。

未成年者の喫煙は法律で禁止されているため、信頼性のある情報を得ることは難しいといわれるが、過去の喫煙率に関する調査では、高校 2 年生男子で 22.2%、高校 3 年生男子で 25.4% と高い数値が示されている<sup>4)5)</sup>。また、喫煙の将来予測については、高校 2 年生男子の 27.5% が、20 歳になったときには喫煙すると答

えており、本校の数値はかなり低率となっている。しかし、今回の調査が記名式であったことや、特に高脂血症群では健康教育を行う場での調査実施ということが、回答に少なからず心理的な影響を及ぼしたことも考えられる。

側でたばこを吸われることについては、何らかの迷惑感を有しているものがほとんどであった。総理府の統計においても、喫煙に対して何らかの迷惑感を有している人は全体では 65% であったが、非喫煙者に限れば 80% と高率であった<sup>1)</sup>。また、その内容についても、煙やにおい、健康に対する影響をあげるものが大多数で<sup>1)</sup>、本校の調査結果とも共通していた。受動喫煙による被害についての調査報告もいくつかあるが、米国の環境保護局は、環境たばこ煙は“ヒトにがんを引き起こすことが確実に証明された発がん物質である”と認定している<sup>6)7)</sup>。受動喫煙は、単に不快なものというだけでなく、健康に重大な被害を及ぼすものとして認識されなければならない。

初回喫煙の動機は、中・高校生ともに「好奇心」、「友人にすすめられて」、「何となく」という 3 つの項目が上位を占めている<sup>4)5)8-10)</sup>。また、喫煙している男性の 44% が 20 歳未満に喫煙を開始していることから、高校生のうちに“喫煙はしない”という意識を定着させることが重要と思われる。高校生の喫煙を防止するためには、法律で禁止されていることを理由とするよりも、健康教育から、即ち自分と周りの人の健康に悪影響を及ぼす有害物質であるとの認識を持たせることが重要である。今回は高脂血症群と一般群での比較を試みたが、高脂血症群も健康教育を行う前に調査したため、両者に有意な差は認められなかった。しかし、健康教育がどのような影響を与えるかを知る意味でも、今後指導後に調査を行うことも必要と思われる。

また、薬物乱用・喫煙・飲酒行動と規範意識

の関連をみた調査から、これらの行動と一般規範意識の得点には関連性が認められている。薬物乱用・喫煙・飲酒行動の経験のないグループでは一般規範意識の得点が高いことから<sup>5)</sup>、その規範意識を形成する場としての家庭教育の重要性も示唆された<sup>1)</sup>。今回の調査では、喫煙行動の将来予測において、「大学生になったら吸う」と回答したものの割合は低率であったが、今後どのような推移をとるか、大学入学後に追跡調査を行うことも必要であろう。

### 総 括

1. 健康診断の血液検査で高脂血症を指摘された高脂血症群の生徒と、各学年から選んだ一般群の生徒に対して、たばこについての意識調査を行った。
2. たばこの健康への影響については、発がん性についてはほとんどのものが認識していたが、虚血性心疾患との関連について認識しているものは少なかった。また、依存性についても3~4割程度のもものが認識しているに過ぎなかった。
3. たばこへのイメージは、否定的な印象を持つものが多かった。
4. 将来の喫煙予測では、「吸う気はない」と答えたものが8割程度であった。
5. 間接喫煙に対しても、何らかの迷惑感を有しているものが9割程度いた。
6. 健康教育のテーマとしては、依存性の問題が重要であるとともに、発がん性だけでなく、心臓血管系への影響についても理解してもら

う必要がある。

7. 今後どのように意識が変化するか、追跡調査が重要である。

### 謝 辞

今回の調査にあたりご協力いただきました慶應義塾高等学校の鶴田先生、西村先生、皆川先生、および生徒の皆様深く感謝申し上げます。

### 文 献

- 1) 総理府広報室編：日本人の酒とたばこ。大蔵省印刷局，1989
- 2) 伊佐山芳郎：嫌煙権訴訟の実務と市民運動。判例タイムズ，38: 58-62，1987
- 3) 村松常司：タバコに係わる小・中・高校生のイメージに関する研究。学校保健研究，27: 431-441，1985
- 4) 尾崎米厚，蓑輪真澄：わが国の中・高校生の喫煙実態に関する全国調査（第1報）中・高校生の喫煙率。日本公衆衛生雑誌，40: 39-48，1992
- 5) 市村國夫，他：中・高校生の薬物乱用・喫煙・飲酒行動と規範意識。学校保健研究，43: 39-49，2001
- 6) 松崎道幸：受動喫煙による健康影響。臨床科学，34: 173-179，1998
- 7) 伊佐山芳郎：現代たばこ戦争。岩波新書，1999
- 8) 白水美智子，柴田彰：中学生の喫煙と諸因子との関連（第1報）。日本衛生学雑誌，40: 596-604，1985
- 9) 白水美智子，他：高校生の喫煙と諸因子との関連（第1報）。学校保健研究，28: 589-596，1986
- 10) 厚生省編：喫煙と健康。喫煙と健康問題に関する報告書第2版。保健同人社，1993
- 11) 千石保：日本の高校生。日本放送出版協会，1998